

# ニ落ち現象\*

## On Ni Drop in Japanese

吉田 幸治

YOSHIDA Koji

### <要旨>

本稿は通常であれば「本当にやばい」のように「に」を必要とする表現が口語表現において「本当やばい」のように「に」を省略して表現される発話を「ニ落ち」と呼び、その特徴を調査し、音韻特性と使用背景を考察するものである。この現象は限定された状況と場面でしか生じないが、今後使用域が増加する可能性を秘めたものであり、現時点で明らかなことを報告し記録しておくことにする。

キーワード：ニ落ち、省略、4モーラ制約、状況と場面

## 1. はじめに

口語体の言語表現には様々な特徴がみられるが、特に顕著なものとしては省略をあげることができる。省略もさらに細かく分類することは可能であるが、いずれの省略現象を観察したとしても、そこには一定の規則性があることは明らかである。

本稿では近年若年層の間で広がりつつあるニ落ち現象について報告と若干の考察を行う。以下、2節ではどのような現象であるのかを概観し、3節でニ落ちに関連する制約をみる。4節は今後の変化の方向性を確認し、重要となる視点を示す。5節はまとめである。

## 2. 省略現象と事実観察

### 2.1. 省略の特徴

本稿で扱うニ落ちは口語体に特徴的な現象と考えられるので、ここでは口語体における省略に関する言語学的研究の歴史について要点を説明しておきたい。

まずほぼすべての言語に関してあてはまる事実として、場面・状況から明らかな要素は省略されやすいということがある。これは繰り返しの場面などでは省略せずにコソアド言葉や代名詞などの代用表現に置き換えられることもあるが、Hinds (1986)が日英比較のなかで述べているように、東アジアの言語においては代用表現にもならず、いわゆるゼロ代名詞になることがめずらしくない。

また、省略要素には一定の順序が存在することが知られており、久野(1978)が提

案している「省略順序の制約」が良く知られている。この制約は、省略が旧情報を表す要素から新情報を表す要素へと順に行われることを述べているもので、細部において違いは見られるものの、多くの言語に当てはまるものと考えられている。

さらに、通常の文法規則から逸脱する現象がみられることも口語体における省略の特徴である。Akmajian (1984)は英語の"Him wear a tuxedo?!"のように会話体でのみ観察される疑問文において時制を担うはずの助動詞が省略され、主格で示されるはずの代名詞が対格標示されるような文を **Mad Magazine Sentence** とよび、その機能と構造を「口語体に限られるもの」として説明している。

このように、本来の規範的な文法から逸脱していながらも容認される表現は、その多くが口語体に限られるものであり、文章体に比べて場面と状況に依存する度合いが強いことには注意が必要である。つまり、省略現象が起きる時には場面と状況が密接に関連しており、あらゆる状況下で生じるわけではないのである。

## 2. 2. 「ヤフー知恵袋」の質問

本稿で取り扱うニ落ちとは次のようなものを指す。容認度に揺れはあるが、近年テレビ・ラジオ、新聞・雑誌などで目にすることが多い表現である。

- (1) a. 明らかやばい  
b. 明らかうまい  
c. 明らか寒い
- (2) a. 本当やばい  
b. 本当ややこしい  
c. 本当臭い
- (3) a. 劇的悲しい  
b. 劇的おかしい  
c. 劇的まずい

後続の要素を修飾する副詞的な機能を担っているので、本来ならば「明らかに」「本当に」「劇的に」とすべきところであるが、いずれの例においても「に」が落ちている。これが本稿で扱うニ落ちという現象である。

この現象に関して、既に能町みね子氏が7年以上前の『週刊文春』誌上において連載コラム「言葉尻とらえ隊」(2015年9月10日号、p. 109)で扱っている。そこでも触れられているのだが、2009年9月15日付の「ヤフー知恵袋」に「このような用法はもしかして昔にあったりするのでしょうか?」という質問があり、次のような回答が寄せられている。

(4) gon3jr さん

2009/9/16 18:00:15

文語の形容動詞「～ナリ」の形から「ナリ」が取れて、語幹が副詞の働きをするようになった語は結構あります。あまりに歴史が古いので違和感はありません。

国語辞典にも「副詞」として載っています。

(1) 例文

「休日は【もっぱら】子供の相手をする」

【もっぱらに】の「に」削除

(元の文語は【もっぱらナリ】)

「【やたら】のどが乾く」「【やたら】偉そうなことばかり言う」

【やたらに】の「に」削除

(元の文語は【やたらナリ】)

「【ひたすら】研究にいそしむ」「【ひたすら】無事を祈る」

【ひたすらに】の「に」削除

(元の文語は【ひたすらナリ】)

日本語学に造詣が深いと思われるこの回答者による説明は、出典を調査していないが、どうやら辞書からの引用のようである。ここで述べられていることが事実であったとしても、それは歴史的な事実を述べているだけで、二落現象を考察するうえでは不十分である。

## 2.2. 内省と口頭調査にもとづく事実

当然のことではあるが、二落現象を深く理解するためには共時的な考察が必要である。そこでまず、筆者が授業を担当している学生のなかで、Instagram, Twitter, Facebookなどを常用しており、他者とのコミュニケーションを苦手としない6名を無作為に選び、以下のような質問を行った。

(5) あなたは普段の会話において、「明らかに」の「に」を省いた表現を用いることがありますか。あるとすれば、どのような表現で、どのような頻度ですか。

(調査期間： 2022年7月13日－7月17日)

これに対する回答は以下の通りであった。

(6) N（女性、20 歳、大阪府出身）

小学生の頃から「明らかつまんない」とか「明らかやさしい」とか言っていました。「に」をつけない方が自然で、つけるとかえって不自然な気がします。

(7) A（男性、21 歳、兵庫県出身）

親しい友人と話す時にはよく使います。いつ頃から使い始めたのか覚えていませんが、言っていて違和感はありません。よく使うのは、「明らかうまい」、「明らかまずい」、「明らか薄い」という味に関係するものが多いです。

(8) S（女性、19 歳、三重県出身）

言われてみれば、友達なんかがよく使っているように思いますが、私はあまり使いません。でも、妹がテレビを観ながら「明らかつまんない」とか言ってます。

(9) T（男性、20 歳、大阪府出身）

独り言や同世代の人と話をする時はよく使います。「明らかきれい」、「明らかうっとうしい」、「明らかださい」のように、判断に関するものが多いのでは。

(10) M（男性、20 歳、奈良県出身）

全く使いませんが、理解はできます。他人に対して「わかり切っていることだぜ」という意味で「明らかー！」というのは使うことがあります。

(11) C（女性、20 歳、大阪府出身）

年配の人に対しては失礼な気がするので使いません。友人間では時々使います。

僅かに 6 名の意見を集めただけなので統計的信頼度は高くないが、いくつか明らかとなったことがある。

まず第 1 点目であるが、筆者はこの意見を聞くまでニ落ち現象は関東周辺では許容されるが関西ではあまり使われないものであろうと想像していた。しかし、どうやらこの思い込みは誤りのようで、(6)(7)(9)のような意見から判断すると、若年層においても関西でも少しずつ広がりを見せつつあるようである。(8)の意見で妹が使っているというのは示唆的である。そして、ここでもやはり SNS の影響があるのではないかと考えられる。<sup>1</sup>

第2点目として、判断が行われる文脈で多用される傾向がみられる。この点に関しては、上で言及した能町みね子氏のコラムにおいて以下のように説明されていることと一致しているように思われる。

- (12) 「明らか(に)」は、大雑把に分ければ、若者言葉の代表格であるような「超」と同じ「強調」の言葉として使われています。最近の若者言葉は主観よりも客観と共感を重視するので、たとえば主観的な「信じられない」よりも客観的な「ありえない」が好まれる。「明らか」が流行るのも明らかこの流れだと思う（早速使ってみた）。

（『週刊文春』2015年9月10日号、p. 109）

この指摘はかなり重要であると思われる。特に、共感を求めているために「明らか」の使用が増加傾向にあるというのはかなり本質を捉えているのではなかろうか。

しかし、もう一步踏み込んで考えてみる必要がある。主観性が低い表現であれば全てが許容されるというわけではないからである。次節ではこの点を考えてみたい。

### 3. 音韻制約

別宮(1977)以降広く知られている事実であるが、日本語では基本的な単位としては2モーラ1フットが存在し、その倍の4モーラと2倍の8モーラが基本のリズムとなっている。短歌や俳句において、表面的には五七五（七七）と数えられるものが、休止部分を含めると八八八（八八）となることは日本語音韻研究の常識となっている。

ここで留意すべき点は、「日本語では休止部分を含めて数える」ということと、「表面的には奇数のように思われる文字数ではなく、休止部分を含めた偶数が基本となる」という点である。

当然のことながら、若者言葉もこの傾向から逃れることはできず、本稿で扱っているニ落ち現象の多くも4モーラになっている。「明らか」だけでなく、1節で挙げた「本当」、「劇的」も4モーラである。つまり、ニ落ちの音韻制約として次の(13)があると考えられる。

- (13) ニ落ちは「に」を落とした結果、4モーラとなる場合に許容されやすい。

もっとも、ここで示した4モーラ制約はニ落ちに限られるものではない。多くの省略現象に見られることであり、以下のような様々なものが観察される。

- (14) a. やわらかい⇒やわらか（ex. やわらか頭）

- b. うるさい⇒\*うるさ(うるさい奴 vs. \*うるさ奴、ただし「うるせえ奴」は可)
- (15) a. 突然に降ってきた雨
- b. 突然降ってきた雨
- (16) a. とっさに弓矢をかわした。
- b. \*とっさ弓矢をかわした。

(14)において、容認される表現はすべて 4 モーラとなっている点に注目されたい。(15a)と(15b)の対比は二が省略されても容認されているが、その場合であっても「とっぜん」は 4 モーラである。また、「とっさ」が 3 モーラとなっている(16b)が容認される可能性があるが、その場合には「とっさ弓矢」が構成素を成して一つの名詞句となっている解釈であり、(16a)の意味で解釈されるわけではない。

このように、日本語では音韻制約がかなり厳しく可能な表現を制約するのであるが、近年ではこの制約を無視する表現が目立つようになってきていることにも注意しておきたい。それは命名において頻出する現象で、俗に「キラキラネーム」と呼ばれるものに多い。次の例を見られたい。

- (17) a. 行晃男 (いけてるお)
- b. 音音子 (のんのんこ)
- c. 月々奈子 (るなるなこ)

(17)のような命名はふざけているのかと思われるかもしれないが、名付けた人にとっては大真面目のようで、ごくわずかながらも実在するようである。これらの名前は 4 モーラの後に無理に「男」「子」をつけることによって、本来の日本語のリズムから逸脱してしまっている。

今後このような本来の 4 モーラ制約を無視するものが増えるのかどうかを予想することは難しいが、二落ち現象のように 4 モーラ制約に従おうとする力と、この制約を無視する力が同時に存在している点には注目しておいてよいと思われる。

#### 4. 二落ちは生き延びるか

現代日本語における /h/ が平安時代には /p/ であったと推定されることは日本語の歴史を研究する人にとっては常識に属する事項であるが、言語が歴史的な変化を受けることは必然といえる。つまり、本稿で扱っている二落ち現象も言語変化の一つであり、消滅する可能性と同時に定着する可能性の両方がある。では現時点ではどちらの可能性の方が高いであろうか。

参考として役立つものが「イ落ち現象」である。イ落ち現象はほぼ定着している

といえるもので、(18)のように口語で用いられるものである。

- (18) a. 濃っ。(cf. 濃い。)  
b. ださっ。(cf. ださい。)  
c. 短っ。(cf. 短い。)  
d. あほくさっ。(cf. あほくさい。)  
e. 気持ち悪っ。(cf. 気持ち悪い。)

(今野 (2012: 5))

このイ落ち現象に対して、独り言に近い機能があることを指摘しつつ、今野(2012: 27)は「ある文法形式が当該言語の通常の文法的慣習からみて有標な場合、その形式の機能は、対応する無標形式の機能に比べ、特化している」と述べている。つまり、頻度と一般性が低い表現は特定の文脈で使われるのが普通なのである。言い換えると、特別な表現は特別な文脈が要求しているものなのである。

ニ落ちに関していえば、独り言で述べられることが多く、この点ではイ落ちと類似しているのであるが、頻度に関していえば低いと思われる。それは、イ落ち現象が生じるのは形容詞であるのに対して、ニ落ちは副詞に対して起こる現象だからである。この点についてもう少し解説すると、述語としての形容詞は文の主要部であり、文を成立させるためには不可欠な要素である。一方、副詞は文の成立に不可欠な要素ではなく、原則として付加詞(adjunct)である。そして、述語であるがゆえに単独で発話されることが多いイ落ちとは異なり、ニ落ちが副詞部分だけで発話されることがあるとしても、それはニ落ちとは無関係な現象である。(1)-(3)の例から明らかのように、いずれの場合にもニ落ちが起きているのは直後に形容詞があるからこそ生じている現象だからである。

このような分布上の差異を考慮すると、ニ落ちはイ落ちほど定着するとは思われない。もともとの頻度が低いため、流布しにくいからである。

もちろん、なんらかの契機が引き金となって使用頻度が上がることがあるかもしれないが、現時点ではまだそれほど人口に膾炙している表現とはいえないであろう。

ただし、強く定着しそうな例も存在する。それは「明らか」「さわやか」「やわらか」「なめらか」のように、「か」で終わるものである。筆者が Internet 上で Google 検索を行ってみたところ、かなりの頻度でニ落ちが起きている。これは、次のような理由によるものであると考えられる。

- (19) a. 「か」で終わる形容詞は名詞を修飾する用法が基本  
b. 「か」で終わる形容詞が副詞に転用された場合には単独で発話されることが多い



c. 「に」をつける方が例外的

つまり、「か」で終わる副詞の場合には、もともと「に」のつかない表現が無標であって、つけるとかえって不自然な場合もあるといえる。この表現に関してはさらに詳細な調査が必要であろう。

## 5. おわりに

本稿ではニ落ち現象の特徴について若干の考察を行った。この現象はまだそれほど広範に受け入れられ使用されているわけではないが、特定の場面と状況においては頻出することもある表現として認知しておいてよいものと思われる。

もちろん、他の多くの省略表現と同様、意味と機能、統語構造に関する考察も必要であろう。またコーパスを利用した量的考察と史的考察も必要である。これらはすべて今後の課題としたい。<sup>2</sup>

## 注

\* 本稿は 2010 年 8 月中頃にインターネット上のいくつかの掲示板における書き込みを読んでいた時に着想を得たものである。10 年以上の年月が経過してしまったのは単に筆者の怠慢によるものである。なお、無記名査読者による意見をいただいたことにより記述の精度を高めることができた。ここに記して感謝する。

1. 急速な言語変化の背景に SNS 並びに Internet 上のやり取りが影響していることは多くの日本語研究者が指摘していることであるが、特に発音・アクセント・イントネーションに対する影響が強い。
2. 査読者から概略「調査数が少なく例の挙げ方も恣意的ではないか」「音韻制約には例外が多い」という指摘があったが、本稿の主目的はひとまずニ落ち現象について報告することであり、豊富なデーターにもとづく詳細な分析は他日を期したい。

## 参考文献

- Akmajian, Adrian. (1984) "Sentence Types and the Form-Function Fit." *Natural Language and Linguistic Theory* vol. 2 No. 1 pp. 1-23.
- 別宮貞徳. (1977) 『日本語のリズム』. 講談社.
- Hinds, John. (1986) *Situation vs. Person Focus*. Kuroshio Publishers.
- 今野弘章. (2012) 「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」『言語研究』第 141 号. pp. 5-31. 日本言語学会.
- 窪園晴夫. (2016) 『現代言語学入門 2 日本語の音声』. 岩波書店.
- 久野暲. (1978) 『談話の文法』. 大修館書店.